

自由への途

2021年10月20日
教育学部 清水禎文

聖書 ヨハネによる福音書 8章 31節～38節

³¹ イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。³² あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」³³ すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」³⁴ イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。³⁵ 奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。³⁶ だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。³⁷ あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。³⁸ わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。」

自覚的に聖書を読み始めた頃のことです。最初に読んだのは、やはり福音書でした。マタイ、マルコ、ルカの共観福音書がそれぞれ特徴のある福音書であることさえ知らぬまま、この地上を歩まれた人間としてのイエスの物語を読み解こうとしていました。まずは福音書のストーリーを読み解こうとしていたのです。今から振り返れば、自分自身で掴み取ろうとするから理解できない、自分自身が御言葉によって掴まれた時に初めて理解できるようになる。この信仰の逆説が理解できていなかったのです。自分自身にとって「合理的」と思われる部分だけを読んでいました。

福音書の中でも手を焼いたのが、本日、テキストとして読み上げたヨハネ福音書です。ヨハネ福音書は、抽象度の高い哲学的な響きを持つ言葉が散りばめられています。その書き出し部分は、まるで映画でも見ているような芸術的、美的な雰囲気を漂わせています。物語の中に深く引き込まれていくような不思議な力を持っています。魅力の尽きない福音書です。しかし、初心者にとっては取りつきにくい福音書でした。

実際、ヨハネ福音書の文章は読み易いものではありません。むしろ読みにくいと言えます。その理由はいくつかあるように思います。たとえば、物語の中の対話は、何かずれている、イエスと弟子たちとの対話、イエスと人々との対話はきちんとかみ合っていない、ちぐはぐな感じのする言葉のやり取りになっているように感じます。

この印象は、今でも変わることはありません。ただ、長い時間をかけて読むうちに、

文字と文字との間、余白の部分の意味が多少見えるようになりました。しかし正しい読み方があるとするれば、人間の理解を越えた、もっともっと深い世界の中にあることでしょう。究極的には、今も生けるイエス・キリストとの出会いが、ヨハネの残した言葉の真の理解をもたらすことになるでしょう。

さて、今日のテキストは大変有名な言葉を含んでいます。32節「真理はあなたたちを自由にする」です。この言葉に導かれながら、皆様とご一緒に、ミッションスクールとして建てられた宮城学院の歩みについて、思いを巡らせてまいりたいと思います。

宮城学院資料室から毎年『宮城学院資料室年報 信望愛』が出版されています。宮城学院の歴史を知る上で、貴重な情報を提供してくれています。本学の貴重な資料の紹介、翻刻など、興味深い記事が並んでいます。

2020年度年報の中に、私にとって興味深い報告がありました。『「現在在校生中基督教信者名簿(明治三十九年十一月廿九日改定)」「明治三十九年九月一日以降洗礼受領者調」の紹介と若干の考察」です。今から百年以上前の貴重な資料の翻刻・紹介です。

資料の解説によれば、本科(五年制)在籍生徒 162名のうち、基督教信者数は71名、約40パーセントです。注目すべきは、学年進行とともに基督教信者数が増えていることです。1年生は11パーセント、2年生は30パーセント、3年生は47パーセント、4年生は89パーセント、そして5年生は100パーセントが基督教信者でありました。

このように受洗者が多くあった背景として、著者は次のように述べています。

本資料に見える本科五年生が宮城女学校で過ごした五年間は、火災で校舎全焼という予期せぬ不幸に見舞われた直後から始まったが、ズーフル校長を始め、ワイドナーやパーウェルという婦人宣教師たちが日本人教職員と力を合わせ、新寄宿舍・新校舎献堂に向け、宮城女学校の益々の発展という明るい未来のために一丸となって困難に立ち向かっていた時期であった。(71頁)

当時の宮城女学校は火災という大きな試練に見舞われ、困難な時でありました。その中であって、教職員ばかりではなく、おそらく学生もまた「明るい未来のために一丸」となっていた時でありましょう。

そして、解説では『宮城女学校五十年史』、宮城学院百年史『天にみ栄え』を参照しつつ、寄宿舍の果たした役割について触れ、結論部分で次のように書かれています。

宮城女学校における「寄宿舍」は、単に遠方の生徒たちの生活場所を確保するという場だけではなく、……伝道活動の主要な場になっていたことがわかる。婦人宣教師との寄宿舍での福音に基づく人格的交わりの日々を通して、生徒たちに、キリ

スト教の精神を涵養させる最も重要な場であったと言えよう。(73 頁)

学生たちは、寄宿舎において婦人宣教師たち、教職員たちと寝食を共にしながら、福音に基づく人格的交わりの日々を実践し、キリスト教精神を単なる知的理解にとどまらず、身体的なレベルで、生活のレベルで、皮膚感覚として学んでいたと言えるでしょう。

この報告を読みながら、私は時代と空間を越えて、いろいろな空想の旅をすることができました。内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』には、寄宿舎生活を共にする若者たちの、道を求める熱心さが鮮明に、そしてコミカルに描かれています。ディートリヒ・ボンヘッファーの『共に生きる生活』も、嵐のような政治状況の中での共同生活の意義を福音的に解いています。さらに現代まで視野を拡げ、寄宿舎教育を思い浮かべることができました。寄宿舎教育はオックスフォードやケンブリッジなどの名門大学の教育の要です。東アジアの大学でも積極的に寄宿舎教育を取り入れようと努めている大学もあります。

寄宿舎での婦人宣教師や学友との共同生活がキリスト教の精神を涵養したのであるとすれば——事実そうでした——、寄宿舎や学生寮の教育的意義を再評価する必要があります。

もう一度「現在校生徒中基督教信者名簿(明治三十九年十一月廿九日改定)」
「明治三十九年九月一日以降洗禮受領者調」に戻しましょう。

明治の末年、宮城女学校では多くの受洗者が出ました。5年生に至っては100パーセントの学生が洗礼を受け、キリスト者となりました。しかし、その後、彼女たちがどのような生涯を送ったのか。本校に残された資料から、彼女たちの生涯の歩みを読み解くことは、ほとんど不可能でありましょう。彼女たちの中には、キリスト者として生涯として終えた方もいたことでしょう。また、若き日に覚えた聖書と賛美を携えながらも、キリスト者として生きることができなかった方もあるでしょう。さらに、キリスト教とは関わりのない生涯を送った方もあることでしょう。

そうだとすると、100パーセントの学生が洗礼を受けた意義は何だったのだろうかと考えさせられました。寄宿舎生活で、若者らしい集団心理も働いたに違いありません。福音の受け入れ方は、まちまちだったに違いありません。「種を蒔く人のたとえ」のように、道端に落ち、鳥が食べてしまった種、石地に落ちてすぐに芽を出したが枯れてしまった種、良い土地に落ちて豊かな実を結んだ種もあったに違いありません。つまり、寄宿舎で共同生活をしていたとはいえ、一人ひとりが異なる条件、制約の下に置かれていたことは間違いのないことでありましょう。そして、卒業後の彼女たちの人生の歩みは、一人ひとりまったく異なっていたことでしょう。

しかし、学生たちが洗礼を受け、一時的だったかも知れませんが、福音の自由の下に生きた。この事実は、やはり意義のあることだったと思います。

今年度、「明治前期におけるキリスト教と地方教育会」というテーマで研究費を受

けました。フィールドは群馬県です。内村鑑三や新島襄の出身地であり、また養蚕地帯であり、横浜との交流もあった群馬県では、早くからキリスト教が広まりました。地方としては珍しく多くの教会が建てられました。教会の中からは、廃娼運動に活躍した県会議員や国会議員も出てきました。教会という枠を超えて、社会改良運動に取り組む人々も排出されました。

史料を読み込んでいく中で、地方のキリスト教界の中で見え隠れするのは、婦人たちの活躍です。教会の歴史、あるいは研究書を紐解くと、町の大店・商家の主、政治家、農村部の豪農、医師、学校教員など錚々たるメンバーが信者として名前を連ねています。男性の働きが表面に出がちですが、婦人たちの活躍も垣間見ることが出来ます。彼女たちはしっかりと教会を支えました。全国的な活動をした婦人たちもいました。キリスト者として十分に生き、輝かしい活躍をした女性たちがいたのです。

しかし、その一方で聞き取り調査をしながら、話を聞きながら思わず沈黙してしまった事例もありました。ある老人からの聞き取りです。「うちの祖母は一人で聖書を読んでいた。けれども、農村地帯であり、周囲の目を気にしていたのかも知れない。また古い家柄ということもあったのかも知れない。教会に足を運ぶことはなかったようだ。最後に、祖母が生涯を通して読み続けてきた聖書を棺の中に入れてやった」。この女性は、明治の前期、若い日に聖書と出会い、洗礼を受け、キリスト者としての歩みを始めたかも知れません。しかし、その後、農村部の旧家に嫁ぎ、信仰生活は全うできませんでした。悲哀としか言いようのない話です。

日本社会においては、今もなお、地域共同体の縛りは存在しています。また「家」の考え方も残存しています。自由に生きようと思っても、さまざまな制約のために、それが許されない空気が支配しています。とくに女性は目に見えにくい社会の圧力の影響を強く受けているのではないのでしょうか。

本日紹介した資料によれば、宮城女学校において、ほとんどの学生たちが洗礼を受け、キリスト者になりました。その後の学生たちの歩みは一様ではなかったと思います。苦勞された方もおられたことでしょう。しかし、宮城女学校在学中の一時だったかも知れませんが、彼女たちは聖書と出会い、福音の自由の下に生きた。この世的なものから解放されて、一人の人間として、一個の人格として神の御前に立つ経験をしました。彼女たちは、まさに真理と出会い、真理によって自由にされたのです。この経験は、彼女たちの人生において、輝かしい一ページを刻んだに違いありません。そして、彼女たちの一生の誇りとなったに違いありません。たとえ一瞬だったとしても、その一瞬には永遠が宿っていたと言えるでしょう。

最後になりますが、今日のテキストは、全体としては、ユダヤ人たちの無理解と造反、裏切りの予告の中に置かれています。もう少し長くテキストの前後を確認すると、祭司長やファリサイ派の陰謀が渦巻いています。全体としては暗い文脈なのです。その暗い闇の中で輝く光の象徴が、「真理はあなたたちを自由にする」との言葉です。この言葉は、時代と空間を越え、宮城学院の歴史も貫き、今もなお輝き続けていま

す。